

# 犬と古洋傘

小川未明

青空文庫



ある村から、毎日町へ仕事にいく男がありました。どんな日でも、さびしい道を歩かなければならなかったのです。

ある日のこと、男はいつものごとく考えながら歩いてきました。寒い朝で、自分の口や、鼻から出る息が白く凍って見えました。また田圃には、霜が真つ白に降りていて、ちようど雪の降ったような、ながめでありました。

このとき、どこからか、赤ん坊の泣く声がしました。男は思わず歩みを止めて、あたりを見まわしたのであります。

「はてな、赤ん坊の泣く声がきこえたが……。」  
しかし、人の影はなし、近くに人家もなかったから、たぶん、

空<sup>そら</sup>耳<sup>みみ</sup>だろうと思<sup>おも</sup>つて、また歩<sup>ある</sup>き出<sup>だ</sup>しました。

すると、今<sup>こんど</sup>度は、前<sup>まえ</sup>よりも、もつと近<sup>ちか</sup>く、赤<sup>あか</sup>ん坊<sup>ぼう</sup>の泣<sup>な</sup>く声<sup>こえ</sup>がきこえてきたのです。

「たしかに赤<sup>あか</sup>ん坊<sup>ぼう</sup>だ、どこだろう？」

彼<sup>かれ</sup>は、もう自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の耳<sup>みみ</sup>を疑<sup>うたが</sup>いませんでした。きつと、この近<sup>きん</sup>傍<sup>ぼう</sup>にだれか赤<sup>あか</sup>ん坊<sup>ぼう</sup>を捨<sup>す</sup>てたものがあるにちがいないと思<sup>おも</sup>いました。

「そんな悪<sup>わる</sup>いことをするやつは、どこのやつだろう。」と、男<sup>おとこ</sup>は、この寒<sup>さむ</sup>空<sup>ぞら</sup>に捨<sup>す</sup>てられた、かわいそうな赤<sup>あか</sup>ん坊<sup>ぼう</sup>を、早<sup>はや</sup>くさがし出<sup>だ</sup>して、どうかしてやらなければと思<sup>おも</sup>つて、声<sup>こえ</sup>のきこえる方<sup>ほう</sup>へ近<sup>ちか</sup>づいていきました。

見<sup>み</sup>ると、それは、赤<sup>あか</sup>ん坊<sup>ぼう</sup>でなく、やぶの中<sup>なか</sup>に、まだ生<sup>う</sup>まれてか

ら間まがない、やっと目の開あいたばかりの小犬こいぬが三びき、箱はこの中なかに入れて捨すててありました。

彼かれは、赤あかん坊ぼうでなく、小犬こいぬでよかつたと思おもいましたが、その捨すてられた小犬こいぬの、いじらしいようすを見ると、また別べつの不憫ふびんさが心こころの中なかにわいてきて、

「こんな、まだ独ひとり歩あるきのできぬ小犬こいぬをだれが捨すてたのだろう、情なさけ知しらずの人間にんげんだ。」と、思おもいましたが、自じ分ぶんは、どうすることもできません。

「ああ、かわいそうなものを見みたな。」と、ただ、気持きもちを暗くらくして、かわいそうとは思おもいながらも、そのまま、男おとこはいつてしまいました。

「こんな寒空さむぞらに、それに食べ物たものもないのでは、きつと死しんでしまうだろう。」と、三びきの小犬こいぬのことを思いながら、道みちを急いそいだのです。

しかし、いくら思うおもまいとしても、白しろと黒くろの三びきの小犬こいぬが、重かさなり合あつて、彼の顔かおを見みたとき、尾おをぴちぴちと振ふつて、助たすけてくれといわぬばかりに鳴ないたいらしい姿すがたを、男おとこは、いつまでも目めから取とることができませんでした。

彼かれは、町まちへ着つくと、いつものごとく仕事しごとにとりかかりました。仕事しごとをしている間あいだは、犬いぬのことを忘わすれていましたが、その日ひの仕事しごとが終おわって帰かえり道みちにさしかかると、朝あさ見た犬いぬのことが、思おもい出だされて、

「どうなつたろう？」という、好奇<sup>こうきしん</sup>心も起<sup>お</sup>こつて、なんだか、そのやぶの近く<sup>ちか</sup>になると、重<sup>おも</sup>苦<sup>くる</sup>しいような気<sup>き</sup>さえしました。

彼<sup>かれ</sup>は、やぶのそばへきて、耳<sup>みみ</sup>をすましました。  
もう泣<sup>な</sup>き声<sup>こゑ</sup>はきこえません。

「はてな、みんな死<sup>し</sup>んでしまつたのかしらん。」

怖<sup>おそ</sup>ろしいものでも見<sup>み</sup>るようにして、のぞいてみると、三<sup>さん</sup>びきのうち二<sup>に</sup>びきは死<sup>し</sup>んでしまつて、一<sup>いち</sup>びきだけが、こもから出<sup>で</sup>て死<sup>し</sup>んだ兄<sup>きょうだい</sup>弟<sup>だい</sup>のまわりをまわつていました。

この一<sup>いち</sup>びきも、晩<sup>ばん</sup>には、死<sup>し</sup>ぬであらうと思<sup>おも</sup>います。

男<sup>おとこ</sup>は、胸<sup>むね</sup>の中<sup>なか</sup>が苦<sup>くる</sup>しくなりました。よほど、この一<sup>いち</sup>びきを家<sup>いえ</sup>へつれていつて、助<sup>たす</sup>けてやろうかとも考<sup>かんが</sup>えました。

だが、その世話せわが、またたいへんだとも思おもいました。見みなければ、知らしずにしたことだ、そうだ、おれは、見みなかつたことにして、このままいつてしまおう……と、気きの弱よわい彼かれは自分じぶんの心をはげまして、そのまま小犬こいぬを見捨みすてて、家いえへ歸かえつてしまいました。

その夜よは、前まえの晩ばんよりも寒さむく、それに、風かぜさえ烈はげしかったのであります。

男おとこは、たびたび目めをさまして、床とこの中なかで、後あとに一いびき生いき残のこっていた、いじらしい犬いぬの姿すがたを思おもい出だしていました。

翌よくじつ日かれ、彼かれは、その道みちを通とおるのが、なんとなく心こころがとがめて、ほかの道みちを遠とおまわりして仕し事ごとにいきました。歸かえるときも同おなじでし

た。二、三日の間にちあいだというものは、その道みちを通とおることができなかつたのです。

ある日ひ、雨あめが降りふそうだったので、男おとこは、急いそぐために、その道みちを通とおったのであります。

「どうなつたらうな？ きつと、三びきとも死しんでいるにちがいない。それともしんせつな人ひとがあつて、功德くどくにどこへか葬ほうむつてやつたかもしれないが。」と、犬いぬの捨すてられた場所ばしょに近ちかづくにつれて、男おとこは思おもつたのでした。そして、そのまま過すぎることができずに、ついやぶ蔭かげをのぞいて見みると、犬いぬの死骸しがいもなければ、犬いぬの入はいつていたこも見みえませんでした。そして、その場所ばしょに一本ほんの古ふる洋傘ようさんが置おいてありました。

おとこ  
 男は、その洋傘を拾って、開けてみると、まだりっぱにさせる品物でした。

「このまま腐らしてしまうのは惜しいものだ。さいわい、雨が降って、立ち去りましたが、家に着かぬうちに、雨がぽつぽつ降り出してきました。」

「いわぬことか、いいものを拾ってきた。」といって、洋傘を開いてさして歩きますと頭の上で、クンクン小犬のなき声がありました。彼は、びっくりして、洋傘を投げ出すと、いっしょうけんめいに駆け出しました。

「あのとき、おれが拾ってやれば、一ぴきにしろ犬の命は助かつ

切っただ。一本ほんの洋傘こうもりより、生き物ものの命いのちのほうが、どれほど大たい切せかshれないのだ。」と、正直しょうじきな男おとこだけに悟さとったのでした。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「犬《いぬ》と古洋傘《ふるこうもり》」  
なっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 犬と古洋傘

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>